

実践的な情報提供で、日本の教育をサポートする。

株式会社教育新聞社・代表取締役社長

齊藤英行

小中高の教員に向けて、教育関連情報をいち早く届けている教育新聞社。代表取締役社長の齊藤英行さんに、教育現場が直面している問題などについて伺いました。

20代の先生ばかりが増え、世代間格差が出ている学校の現状

——教育新聞というのはどういう性格の新聞ですか。

齊藤英行社長（以下齊藤）…教育はすそ野が広いですから、読者は学校の先生、教育委員会、大学、教育関連企業などさまざまですが、基本的に主軸は小中高の教員に置いています。この方々に教育関連の情報を提供することによって、先生方に寄り添い、日々の活動をサポートすることで社会に貢献するというのが目的です。

——週に2回の発行ですね。

齊藤…はい。月曜日と木曜日にペーパーの教育新聞を発行していますが、電子版もありまして、こちらは毎日発信しています。専門紙が電子版を出すというのは珍しいことで、通常は紙面が先で、それを電子版にするわけですが、うちの場合は電子版で

発信したニュースをペーパー版にまとめるという形が多いです。

ペーパーは週2回の発行ですので、どうしても情報が遅れてしまうことがあります。それを電子版で補っています。逆に、ペーパー版なら詳細な記事や図表などを書くことができ、紙ベースで読んだ方が記憶に残りやすいというデータもありますので、お互いの良さを補いあう形をとっています。

内容的には、国の教育政策や各自自治体の関連ニュース、実際の現場でのニュースなどが中心です。例えば、いじめ対策や学力向上のための取り組みなどがあります。その他、識者や企業の方からのご提言、教材の情報なども掲載しています。



——普段、学校の先生とのやりとりの中で感じていることはありますか。

齊藤…そうですね。今、小中高の教員は合わせますと約百万人ですが、最近、若い先生が急増しています。団塊の世代の先生が引退された影響なのですが、対照的に30代、40代の先生がとても少ない。10年、20年前は、あまり教員を採用しなかったのです。そのために、世代間に狭間ができてしまい、スムーズにノウハウな

教育新聞：ペーパー版（毎週月・木発行）
教育新聞：電子版（毎日発信）

どの受け渡しができていないと感じます。

やはり先輩の授業を見たり、教えられたり、その中で得られるものって貴重なんですよ。しかも、若い先生はコミュニケーション能力がそれほどない方が多い。パソコンでの情報共有はできても、対面での会話が苦手なんですね。ですから、その溝を埋めることも、教育新聞の役割だと考えています。現場で上の先生や、校長先生が「これ、読んでごらん」というような使い方もされていますので、有り難いです。

教員は、もつとも叩かれやすい公務員

——他のメディアとの違いは？

齊藤：報道に関して第三者としての公平性、中立性ということは強く意識しています。どうしてもメディアというのは、タイトルや見出しになりやすいものを取り上げてしまつて、結果として偏つた報道になつてしまふことも多い。悪く言えば、「面白おかしく」を優先してしまふ。

例えば、いじめ問題の報道では、

学校が何も対応策をとっていないかっように読み取れるケースも多いでしょう。でも、普段から現場を見ている私たちに言わせると、何らかの対策をとっていることの方が多いのです。なにしろ、これだけの社会問題になつていて、何かあれば矢面に立つ学校が手をこまねいているわけがないんですね。

もちろん、学校を擁護するわけではなく、批判すべき点は批判しますが、他のメディアに欠けている情報も掲載して、課題を明確化して実践的に活用できるようにと考えています。ですから、保護者の方が読んでも参考になるのではないのでしょうか。実態がよくわかるはずですよ。

それから、1990年代くらいから、教育現場はがらつと変わりました。と言いますか、社会全体が大きく変化した。親の世代も戦後生まれになり、新人類と言われるような世代が育ち、親子の関係も変わりましたね。そこにネットワークが追い打ちをかけました。笑い話になりますが、隣にいる人との会話をメールでするようなことも起きています。そういう中で、若い先生方が力を発揮するというのはなかなか難しいこと

なんです。だからこそ、新しい教育の流れを知らないに対応できません。

今年度中に、新しい教育方針を示した次の学習指導要領というのが出される予定ですが、ものすごく大きく変わります。例えば、チーム学校。先生方だけではなくて、保健所や警察、ソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどと連携をとりながら、子どもを育てようということなんです。それだけ聞くといいじゃないかと思えるわけですが、実はこれ、先生には大きな負担にもなります。関連する人たちの窓口になる先生が必要にもなつてきますが、実際にはいません。校長先生も新しい体制の中でリーダーシップをとらなくてはならない。大変だと思っています。

ただ、意義がないわけではありませぬから、私たちも役立つ情報を提供してサポートしていこうと考えています。

——これからの教員に求められることはなんでしょうか。

齊藤：難しい質問ですね。でも大きく言えば、やはりコミュニケーション能力でしょう。教員って、もつとも叩かれやすい公務員なんです。他



齊藤英行 [さいとう・ひでゆき]

株式会社教育新聞社 代表取締役社長

1959年東京生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。教育新聞社編集局記者、財団法人図書教材研究センター事務局長など歴任。2013年1月、取締役編集局長就任。2014年11月、取締役社長就任。2015年11月、代表取締役就任。現在に至る。全国教育研究所連盟委員、民間教育研究所連盟事務局長など務める。

の公務員は、普段の働きぶりは見えませんよね。ところが学校の先生は公開授業もありますし、見られる機会が多い。お子さんがらみですから、親からみれば気になることも多くなり、クレームも来ますので、それに上手に対応する必要があります。

それから、聞き上手であること。生徒、保護者、それに同僚の話をきちんと聞けるかどうかは、大きなポイントですね。子どもたちからの情報をキャッチできなければ、いじめだって見過ごすことになるじゃないですか。

教室で先生が話を始めたときに、児童や生徒が静かになるなら、仮に教える能力がそれほどなくても学力は上がります。教室は勉強する場所というのは、子どもたちも分かっています。それを態度に結び付けるには、先生の指導者としての能力が必要になります。クラスがまとまって、競い合って、先生がそれを応援するよきな学級経営ができれば、学級満足度が高く、学力も上がります。最初の二週間で全てが決まるといわれていますから、やはりコミュニケーション能力は、重要な資質と言っているでしょう。

教育新聞は教員を目指す学生にも読まれていて、セミナーなども開いています。最近では、採用試験で口頭試問の内容も重視されます。『このケース、あなたならどう対応しますか』などですね。そういう情報も提供して、少しでも役立ててほしいと思っています。

されど、教員が一番やりがいもある公務員

——齊藤さんご自身は、ご自分のお子さんに対して気を付けていることがありますか。

齊藤…そういわれて思い出しましたが、子どもが小さい頃は話しかけられたときに、必ずテレビを消していました。それが、人の話を聞く礼儀だと伝えたかったのかな。私も聞き上手を目指していたんでしょう(笑)。

——では最後に、教員の方にメッセージをいただけますか。

齊藤…大変とばかり言ってきましたが、できる先生にとっては素晴らしい仕事だと思えます。「小さな親切」運動にも教員や元教員の方が多く関

わっていますが、基本的に真面目な人が多いでしょう。それに、子ども好きです。教育が国の根幹であることに疑いはありません。日本の明日を築くためにも、欠かせない仕事ですので、激動の中を上手に泳ぎ切ってほしいと思います。

生徒の結婚式に招かれた時は教員冥利につきると聞いたことがあります。学校をさぼってばかりいた生徒が真面目になったり、立派な職業

に就いたり、そういう成果を見聞きできるわけです。人間の成長に関わるのですからね。一番やりがいのある公務員とも言えるでしょう。

——私たちも微力ですが、精一杯お手伝いをさせていただきますので、やりがいを感じながら日々の活動にいらしていただくと願っています。

教育新聞には「小さな親切」作文コンクールの入賞・入選者全氏名を掲載していただいています。



株式会社 教育新聞社
東京都千代田区神田神保町1-40-2
五十嵐ビル2階

株式会社 教育新聞社 【企業理念】

私たちは、教育こそが「人づくり」の原点であることを深く認識し、報道を通じてその一端を担っていきます。

私たちは、報道による「国づくり」の理想を掲げ、政・官・民・学の橋渡し役としてよりよい社会の構築・実現を目指します。

私たちは、「人間尊重」を基本とした企業として歩むと同時に、時代を先導する新しい教育・文化の創造に貢献します。

